



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

形而上学と倫理 : ジャンケレヴィッチとレヴィナス

著者	田中 優一
学位名	博士(哲学)
学位授与機関	同志社大学
学位授与年月日	2018-09-13
学位授与番号	34310甲第957号
URL	http://doi.org/10.14988/di.2019.0000000170

博士学位論文審査要旨

2018年7月12日

論文題目： 形而上学と倫理—ジャンケレヴィッチとレヴィナス—

学位申請者： 田中 優一

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 阪南大学 名誉教授 和田 渡

副査： 文学部 助教 服部 敬弘

要 旨：

本論文は、形而上学と倫理の観点から、20世紀を代表する二人の哲学者、ジャンケレヴィッチ（1903-1985）とレヴィナス（1906-1995）の哲学を取り上げ、両者の共通点と違いとについて論じたものである。興味深いことに、両者の関係に触れた研究論文は決して少なくはないが、レヴィナスの側から見たものがほとんどであり、逆にジャンケレヴィッチからレヴィナスを見たものはないに等しい。これは両者の影響関係を考えると奇妙な事態である。本論文は、このような研究状況を踏まえ、むしろジャンケレヴィッチの側からレヴィナスの哲学を捉え直し、両者に共通するいくつかの論点、すなわち、形而上学、死、瞬間、そして道德あるいは倫理の問題を検討し、改めて両者の関係に光を当てたものである。

本論文は、以下の四章からなる。すなわち、第一章「二つの形而上学」、第二章「死と他者」、第三章「生の諸瞬間」、第四章「道德ないしは倫理」である。第一章では、ジャンケレヴィッチの形而上学は、経験的なものと超経験的なものとの混合であり、「ほとんど無」の形而上学と称される。その特徴は、純粋性や絶対性の排除であり、全体性の肯定にある。他方、レヴィナスの形而上学は、ジャンケレヴィッチとは異なり、学というよりも或る種の態度や傾向を表したものである。その特徴は、全体性の否定と他者の絶対性の強調にある。第二章では、死に対する態度と死の意味が問題になる。ジャンケレヴィッチにとって、死とは単なる無化ではない。それは独自の意味をもつ。しかし、レヴィナスには、死は神秘であり、未来なのである。それは他者との関係をもたらず。第三章では、時間と瞬間との関係が問題になるが、両者とも時間に対する瞬間の優位が主張されるという点では共通であるが、ジャンケレヴィッチの場合、瞬間の事実性が問題であるのに対して、レヴィナスにおいては、瞬間の絶対性とその打破が問題になる。最後に、第四章では、道德的行為の根源性という点では、両者は共通であるが、自他関係をどのように見るかという点では、両者はすれ違う。ジャンケレヴィッチは自己の優先か他者の優先かという問題に関して道德行為のアプリオリ性と総合性を指摘することで自他の相互性を主張する。他方レヴィナスは、顔や責任の関係に見られるように、あくまでも他者の優先性を強調する。そして、ここに、両者の決定的な違いが認められるのである。

本論文の意義は、新たな観点から、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの関係を捉え直し、両者の相互照射の関係を明らかにした点にある。従来の研究とは異なり、ジャンケレヴィッチの側からレヴィナスを見ることで、逆にレヴィナスの哲学の難点が明らかになったことは今後の両者の研究を進めていく上で価値のあるものと言える。よって、本論文は博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

総合試験結果の要旨

2018年7月12日

論文題目： 形而上学と倫理—ジャンケレヴィッチとレヴィナス—

学位申請者： 田中 優一

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 阪南大学 名誉教授 和田 渡

副査： 文学部 助教 服部 敬弘

要 旨：

上記審査委員は、学位申請者田中優一氏に対する総合試験を、2018年7月11日、徳照館5階哲学資料室にて、午後5時から2時間30分実施した。

総合審査において、学位申請者は提出された論文の内容および関連事項に関する口頭試問に対して、適切に対応し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる哲学的理解や現代の哲学的課題についても、広範な専門的知識をもちあわせ、深い教養をそなえていることを証明した。

また、語学試験（フランス語、英語）においても、提出された外国語文献読解の課題に対して適切に対応し、学位申請者が研究上要求される語学能力を十分に有していることが証明された。

よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目： 形而上学と倫理—ジャンケレヴィッチとレヴィナス—

氏名： 田中 優一

要旨：

本論文で論じるのは、V・ジャンケレヴィッチ(1903 - 1985)とE・レヴィナス(1906 - 1995)の関係である。ジャンケレヴィッチとレヴィナスの関係を考えた場合、ジャンケレヴィッチからレヴィナスを見た研究はないが、レヴィナスからジャンケレヴィッチを見た研究はレヴィナス自身も含めて既にある。それを踏まえて、本論文で、共通の土台を作って両者の哲学の差異と同一性を見るために、いくつかの問題を取り上げる。すなわち、形而上学、死、瞬間、そして道德あるいは倫理の問題である。

両者の関係を考える上で参考になる、レヴィナスの小論がある。それは、『主体の外』(1987)所収の「ウラジミール・ジャンケレヴィッチ」(1985)である。レヴィナスは、まず次のことを指摘する。すなわち、ジャンケレヴィッチの語りは独特であり、その語りを通して「まるで一つ一つの新しい語が、それに先行する語のなかでは予見不可能なものとして湧き出るかのようである」。さらにレヴィナスは、ジャンケレヴィッチの思考が独創的で深遠な思考であり、かつ詩的でもあると述べる。レヴィナスの語るジャンケレヴィッチは、決して理解し易い哲学者ではない。むしろ、非常に難解な、読み手を困惑させるあいまいさや難解さや理解し難さを含んでいる。興味深いことに、われわれから見て、この両者は、ほとんど共通の課題に取り組んでいたように思われる。

レヴィナスにとって、ジャンケレヴィッチの何が問題だったのだろうか。レヴィナスによれば、ジャンケレヴィッチの哲学とは、「ほとんど(Presque)」、「ほとんど - 無(Presque - rien)」、そして「何だか分からないもの(je ne sais quoi)」の形而上学である。その形而上学とは、「定義できないもの」や「言表不可能なもの」、「書かれなかったもの(non - inscrit)」や「考えられなかったもの(impensé)」への接近である。いわば、沈黙や語り得ないものへの接近である。レヴィナスは、この語り得ないものを、「意識には捉え難い根源的自由における生の体験」、「出来合いの〈同〉にも現在の平安にも満足できない生の体験」と呼ぶ。レヴィナスが語り得ないものとして指摘した、この「生の体験」こそが、ジャンケレヴィッチにとって最も重要な問題であった。ジャンケレヴィッチは、この〈ほとんど - 無〉を「生の諸瞬間」や「持続の諸瞬間」と呼び、それを彼の形而上学の中心に置いた。名づけられることも認識されることもない、この生きられた「生の諸瞬間」について、レヴィナスは、「ウラジミール・ジャンケレヴィッチ」で次のように言う。「たとえば、それが無限小のものであれ、科学の諸理念が把握する、定立されあるいは十分に検討された実在的なものに比べるなら、これらの瞬間は、ほとんど無(presque rien)ということになるだろう。そうであるならば、ほとんど無あるいは《何だか分からないもの》は、《固定された諸観念》の硬直した枠組みに閉じ込められることはあり得ない。この《何だか分からないもの》の意味を語ること、それは新たな考え方や語り方を要求しているのではないだろうか。それこそが、諸事物、諸実体、一般的観念の現れに先立って垣間見られる哲学の問題そのものなのではないだろうか」(p. 117)。この指摘のなかにジャンケレヴィッチの形而上学の課題がそのままある。しかし、この課題はレヴィナス自身の課題でもあったのではないか。では、はたして、ジャンケレヴィッチとレヴィナスはこの課題を新しい考え方や語り方においてうまく解くことができたのであろうか。

この課題はレヴィナス自身の課題でもあったように思われる。なるほど、レヴィナスには、〈ほとんど〉も〈ほとんど - 無〉も〈何だか分からないもの〉も、見当たらない。しかし、本論文におけるわれわれの試みは、先に述べたように、ジャンケレヴィッチとレヴィナスを同じ問題の組上に載せ、その差異と同一性を明らかにすることである。というのも、これまでの研究において、両者の関係は、レヴィナスのほうに重点が置かれていたからである。それを修正して、両者を相互照射の関係に置き直さなければならない。もちろん、だからといって、レヴィナスから見たジャンケレヴィッチを決して軽視するわけではない。

このような観点に立ち、本論文は既に示唆したように四つの問題を取り上げ、以下のことを明らかにした。

第一章「二つの形而上学」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスを比較検討することで、二人の形而上学の基本構造を明らかにした。ジャンケレヴィッチの形而上学は経験的なものと超経験的なものとの混合であり、〈ほとんど - 無〉の形而上学である。それは、純粹性や絶対性を斥けたものである。それゆえ、彼は、「全体性」という概念を肯定する。他者も「私」も同じような全体を構成するのである。他方、レヴィナスの形而上学は、学的なものではなく他人との関係における或る種の傾向や態度を表したものである。レヴィナスの形而上学は、ジャンケレヴィッチのような学的な形而上学ではなく、享樂する主体としての「私」の純粹性や他者の絶対性を認めるものである。したがって、ジャンケレヴィッチと違って、彼は全体や全体性を否定する。

第二章「死と他者」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの死に対する態度と死の意味を解明した。二人にとって死とは、われわれが単純に無に帰すことではない。ジャンケレヴィッチにとって、死は端的な無ではなくて生から死への移行の瞬間である。その瞬間がいつなのかは誰も分からない。それゆえ、死とは単なる無化ではない。死は独自の意味を持つ。彼は、そこに生きる希望を見出し、われわれに積極的に生きることを勧める。他方、レヴィナスにとっては、死は、他人との関係をもたらし、自分のために生きることから他人のために生きることへの転換を促す。死は、未来であり、他者であり、「神秘としての死」である。つまり、他者(他性)としての死である。誰もが死ぬ存在である限り、死によって「私」に他人との関係がもたらされる。それゆえ、彼は死との関係が時間であり、時間の他性と他人の他性とのアナロジーを主張した。他人との関係において「私」は、自分に中心を置くのではなく、他人に中心を置いて生きようになる。

第三章「生の諸瞬間」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの生の諸瞬間について論じた。ジャンケレヴィッチにとって瞬間は、時間への優位を持っている。なるほど、時間は不可逆的であるので瞬間は消えてしまうが、しかし、この瞬間、あの瞬間が存在したことは取り消せないからである。したがって、彼は瞬間の事実性を強調し、〈ほとんど - 無〉としての瞬間という考え方に到達する。それに対して、レヴィナスの場合は、瞬間の絶対性と瞬間の孤独を打破する時間とが問題になる。瞬間は絶対的なものであるが、しかし、瞬間は孤独である。この孤独を打ち破るために瞬間は、時間を必要とする。瞬間の孤独は、他人との関係によって破られるのである。さらに、レヴィナスにおいては、瞬間は、言語の問題として考えられた。その際、彼は、語り得ないものとしての瞬間を二つの語りにおいて語ろうとする試みをした。彼は、自己同定と同一性の循環に終始する〈語られたこと〉から〈語ること〉への遡及を通じて、語り得ない瞬間的な主体が明らかになると考えた。

第四章「道徳ないしは倫理」では、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの道徳や倫理の持つ根源性を取り上げた。ジャンケレヴィッチとレヴィナスは、道徳の重要性という点で方向性が同じである。ただし、他人(他者)の絶対的な優先を認めるか否かで二人は異なる。ジャンケレヴィッチは、「道徳の逆説」が道徳的行為のア・プリオリ性と総合性によって解消されると考えた。なぜなら、道徳においては、道徳的に生きる限り、自分のために生きることと他人のために生きるとは同じだからである。それゆえ、彼は自他関係に或る種の相互性を認める。しかし、レヴィナスは、倫理において、自分のために生きingことを認めない。顔からのメッセージを受け取り応答

しなければならない。「私」は、自分のために生きることから他人のために生きることへ転換するので、自己同一的な「私」ではない。「私」は、他人から与えられた責任を果たすことで、非対称的な自他関係に自己自身を置くことになる。

以上の論述のまとめとしてわれわれは、最後に次のことを解明した。すなわち、ジャンケレヴィッチは、超経験的なものが経験的なものに到来するという〈ほとんど - 無〉の形而上学の立場を一貫して守り、自他関係の相互性を主張した。もちろん、道德である限り、死ぬ覚悟を持って他人を優先することを勧めるが、同時に、他人を優先するために自分が死んではならないと注意を促す。それに対して、レヴィナスは、他者の超越性を守りながら、自他関係における他者の優先性を主張した。なぜなら、レヴィナスは、「根源的に現前し得ないものの現前可能性」としての顔との関係において道德及び倫理の根源性を主張し、自他の関係を、応答可能性としての他者に対する「私」の一方向的な責任という考え方によって捉え直したのである。ここに両者の大きな違いが認められる。レヴィナスの場合、非対称的な間主観性への固執が見られ、それを強調するあまり、ジャンケレヴィッチの言う自己と他者との相互性を見逃すことになったと言えるかもしれない。